

古賀穀堂と鍋島直正公の夢 今かなえる時

地方独立行政法人 佐賀県医療センター 好生館 理事長 中川原 章



1966 福岡県立修猷館高等学校卒業 1972 九州大学医学部卒業、第二外科入局 1977 九州大学大学院医学研究科博士課程（医学博士：生化学）1980 米国ロックフェラー大学留学（客員助教授）1981 九州大学医学部小児外科助手、後に助教授 1990 米国ワシントン大学小児血液腫瘍科客員教授 1993 米国ペンシルベニア大学・フィラデルフィア小児病院 1995 千葉県がんセンター研究所部長（生化学研究部）2004 同所長 2005 千葉大学医学部学術連携大学院教授 2009 千葉県がんセンターセンター長 2014 佐賀県医療センター好生館理事長 佐賀県医療顧問

■2000Audrey Evans 賞（第9回国際神経腫瘍学会・最高賞）2006 千葉県知事表彰 2008 高松宮妃癌研究基金・学術賞（基礎研究部門）千葉県病院局長賞 日本政府観光局（JNTO）国際会議誘致・開催貢献賞（21年度）日本対がん協会賞（個人の部＝25年度）■国際小児がん学会（SIOP）理事・アジア地域会長 米国小児がん臨床試験グループ（COG）国際会員 国際がん学会日本委員会（UICC-Japan）小児がん委員会委員長 アジア小児がん臨床試験グループ（APHOG）代表 日本神経腫瘍臨床研究グループ（JNBSG）代表

佐賀県の医療と福祉には大きな課題が山積しています。たとえば全国有数の高いがん死亡率、医師や看護師の不足、多くの市町村での人口減少、地場産業の弱さ、改革のための財源や人材の不足などです。

さかのぼること180年、第10代藩主直正公の時代も、財政が困窮していたにもかかわらず、教育担当だった古賀穀堂の教えを生かし、人員削減、石炭採掘、製蠶（せいそう）、鶏民救済、人材育成、大砲や蒸気船の製造、西洋医学導入を大胆に実行しました。この大きな潮流の中で天保5年（1834年）に好生館が創設されたのです。

34年、直正公により、西洋医学の病院として日本でも古い歴史のある好生館が創設されたのです。このころに起こった最も大きな出来事のひとつに、1847年に佐賀で流行した天然痘を抑えるため、オランダから取り入れた種痘を1849年に、息子の淳一郎君（のちの第11代藩主直大）のおひろに施行したことがあります。ここから、佐賀藩出身の伊東玄弘が江戸で「種痘所」を開くなど、全国に種痘が普及するきっかけとなりました。1861年から好生館で蘭方医学を学んだ者だけに与えた「免札」は、わが国の医師免許の先駆けとなりました。

明治5年に好生館は佐賀県立病院となり、以降複数の戦争の時代を経て平成22年の地方独立行政法人化まで、時代の荒波を乗り越えて存続してきました。明治時代に好生館で看護師の養成を行っていた記録が残っています。佐賀藩出身の佐野常民が創設した日本赤十字社と関係していたかどうかまでは残念ながらわかりませんが、この時の一部の看護師の帽子に赤いダブルクロス（D）のマークがあり、好生館は歴史的なタリ

++ 好生館創始180周年が我々に問いかけるもの

佐賀

12月13日に好生館多目的ホールで式典とシンポジウム

ニングポイントを迎えたと言えます。初代理事長の十時忠秀先生（現佐賀ハイマツ理事長）が、歴史が動いた感覚にとらわれて、恐れと緊張感に震えたそうです。

十時先生はこの4年間で大幅な改革をされ、財政の面では黒字に転化、医師や看護師など医療者も着実に増やしてこられました。

それを引き継ぎ、180周年を節目として次の改革を進めたいと思います。深刻な超少子高齢化と人口減少となった佐賀県の医療と福祉を担うために、佐賀大学附属病院やほかの病院と連携を密に、180年にわたって培ってきた穀堂と直正公の精神を生かすことが大切です。好生館がこれから歩む道は、日本の医療にとっても重要になるはずだと私は認識しています。

そのために、職員には次の改革を訴えたいと思います。

- ①若い人材と女性の登用
- ②人材育成 自らを律し、人のためになる仕事をいとわぬ医療者を育てる
- ③進取の心 得新しい技術や知識を積極的に導入し、常に最新の医療を県民に提供する
- ④連携と発展 県民に開放された病院とし、連携病院やほか

医療法人社団 如水会 創設180周年をお祝い申し上げます 株式会社 公財 〒840-0292 佐賀県 http://www.s292.co.jp	医療法人 ロコモディカル	創設180周年をお祝い申し上げます	株式会社
--	---------------------	--------------------------	-------------

▶上から錦島直正公重筆の好生館の扁額▶文二年に好生館が発行した内科医免許免状、朱印に「医学寮」とある▶3枚目の写真「看護婦の帽子にダブルクロスがある」▶下の2枚は外科手術室と旧好生館西洋館の外観。



上の写真＝手前右が中川原理事長。左は榎木等（おてき・ひとし）院長／副理事長、後方右から原口美希理事長館長秘書、丸野和年事務部長／理事、吉原久美子看護部長、東裕子理事長館長秘書。



▲錦島直正公は長崎在住の佐賀藩医榎林宗建を介して痘疹をアフリカから取り寄せ、息子淳一郎に種痘を施した。後方に立つっているのが直正。種痘を施しているのが侍医の大石良英。これ以降「痘疹」が全国に広まった。下は当時の種痘の道具。

りつけ医などの協力を積極的に行なう。⑤県民優先の医療。県民が求め安んずける医療を率先して行なう。⑥地域包括ケア構築における役割。救急から在宅・介護までのシームレスな医療連携の推進。⑦個別化医療の確立に向けて。予防および治療学における研究開発の推進。

また、将来構想として、がんセンター、被爆医療センター、看護学校、そして研究所や歴史館、図書館や国際ホールも備えたプレミアムホールの設立もこれから検討される予定です。さらにサガハイマツトや県内の自治体病院、かかりつけ医との連携をいっそう密にして、高度急性期病院としての好生館の役割をしっかりと見定めていきたいと思ひます。

そしてこれらを推進するために、好生館の国際化や医療の質の向上とともに、職場環境と患者・家族への接遇の改善を怠らないことが重要である。このたびの創設180周年記念を機に、好生館が存続してきた歴史に学び、新しい時代の好生館像を求めて、佐賀県民のために起死回生の改革を断行したいと思ひます。そしてそれが日本の医療にも貢献できれば、さすがに佐賀の民だとな、直正公がやるこんでくれるかもしません。

私はアジアで唯一の国際小児がん学会の理事にあり、理事のあいだで日本で学会をやりたいと気運が盛り上がり、2018年の世界大会を日本に誘致することが決まりました。国際化といっても、日ごろから活動し、佐賀で開催したいのです。国際的なアンケート調査で、世界でもっとも行きたい「街」のトップに京都が選ばれて、残念ながら学会を成功させるには京都がいいというこ

とになりました。2千500人から3千人くらい集まりますから、外国人は舞妓さんたちと見た方がいいです。仕掛けは必要ですが、その仕掛けは必要です。私はいろいろな医療者の友人に、国際交流部を作り、組織として「ICA」をサポートしたり、いろいろな国の医療機関と協定を結んで、佐賀のために尽くしたい。それが、ひいては日本のためになる、これはうれしいことばあります。

「創設180年の記念事業を通じて、先人から託された思いに気づきたい」好生館の創設は安政5年（1858）の「医学寮好生館」の命名による。とされ、2009年3月に150周年記念典典を行なっている。ところが、複数の研究者の調査で、ルーツは天保5年（1834）、佐賀藩が西洋医学教育を導入した「医学寮」設立までさかのぼることが明らかになった。今年が創設180年にあたるため、好生館では

記念事業を開催し、設立の理念「好生（徳）民心にあまねし」の生命を大切にす徳を力にゆき渡らせる。錦島直正公と古賀穀堂の「学問なくして名医になるは免束なきことなり」を再評価し、当時の精神を一つ度みかえさせなければならぬと中川原理事長は話す。直正公は「天下の憂いに先んじて憂ひ、天下の樂に後れて樂む」



ICTメンバーは次の通り。前列の4人から左から吉田緑（臨床検査技師）、福岡麻美（医師）、三好恵美子（看護師）、土井球恵（臨床検査技師）。後列左から原淳一（事務）、真武徳至（医師）、中島道子（医師）、小副川晃一（臨床検査技師）、佐野雅彦（薬剤師）、小塩和人（薬剤師）、山口健太（臨床検査技師）、岡本尚子（事務）、永石田中佐智子（事務）。



10月15日は「世界手洗の日」であることを、理事長インタビューのため好生館に向いて初めて知った。毎年恒例の行事として、インフュクション（※ICT）が10月14日から17日まで、手洗いの大切さを人館者に訴えた。また同日の午後から好生館の小児科病棟で、佐賀県と佐賀県ユニセフ協会共催の手洗いイベントが開催され、入院している子供と保護者家族に手洗い劇やダンスなどで正しい手洗いを紹介した。

を自らに課してさまざま改革を行なったという。記念式典のプログラムは次の通り。

基調講演「江戸時代の西学博士佐賀藩」青木茂樹氏。佐賀大学地域学歴史文化研究センター前理事長、座長中川原章博氏。佐賀県立佐賀大学史研究会会長、森田茂

樹佐賀大学医学部附属病院院長、十時忠秀氏。佐賀県立佐賀大学史研究会会長、森田茂樹氏。佐賀県立佐賀大学史研究会会長、森田茂樹氏。佐賀県立佐賀大学史研究会会長、森田茂樹氏。